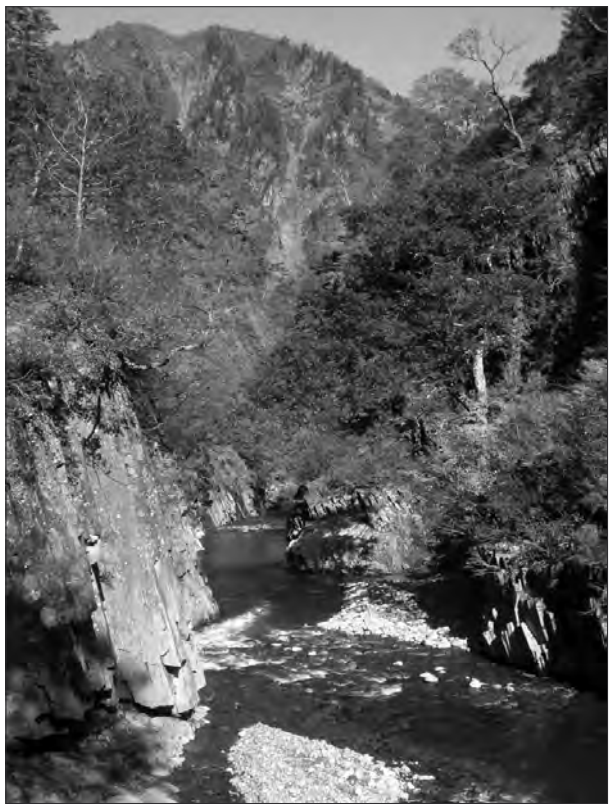
名所物見の旅　其の六拾弐　晩秋の峡谷を行く

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

今年の初夏に訪れた清津峡では、八木沢集落から5キロ地点の高石沢が雪解けによって増水し、どうしても渡渉できずにやむなく敗退した。そこで水量が減少する晩秋を待って、再挑戦すべく出かけてみた。



八木沢集落を夜明け前に出発して7キロの山道をひたすら歩きとおし、苦闘4時間で到着した足尾沢合流地点から眺めた満寿山と清津峡。満寿山の真下あたりが清津峡核心部の黒岩沢付近だと思われるが、ここから先は沢沿いには行けず、念願の核心部に近づくことは出来なかった。

前回の記事（6月17日号）と重複するが、清津川は新潟・長野・群馬の県境に聳える分水嶺・白砂山を主源流として佐武流山、苗場山、谷川岳連峰など豪雪の山々の源流水を集め、十日町で信濃川に合流して新潟市街から日本海へと注いでいる。清津峡は清津川の湯沢町八木沢から十日町小出に至る長さ12キロの山深い両岸切り立った岩壁の間を流れる峡谷で、黒部峡谷、大杉谷と並んで日本三大峡谷に数えられている。わたしが中学生の頃だったか、「日本の渓谷」という写真集に掲載されていた清津峡の深いV字峡谷に感銘を受け、いつか訪れてみたいと願っていた。しかしその機会もないまま、1988年に清津峡で起きた落石事故のため、峡谷沿いの登山道は閉鎖されてしまった。その後、清津峡温泉に完成した遊歩道トンネルによって、ふたたび峡谷の一部を見ることができるようになったが、長さ750メートルの観光用トンネルの見晴台4箇所から眺めるだけではまったく物足りなかった。塚本閣治「上信越国境の山」（昭和21年刊）によると、清津峡は黒岩沢付近よりV字峡谷の奇岩奇勝が続くと解説されており、現在の遊歩道トンネル終点から2.5キロほど上流域に、この峡谷の核心部があると考えられる。そこで初夏に清津峡温泉から新たに作られた満寿山の尾根沿いの登山道を探り、また上流の八木沢集落から沢沿いの道を歩いてみたが、どちらからも核心部には行き着けなかった。今回の山旅ではなんとしても少年の頃写真集で見た、あのV字峡谷をこの目で眺めてみたいと強く思うのであった。

足尾沢近くの登山道の樹間から垣間見る峡谷。切り立った深い岩壁の間を流れる清津峡は、日本三大峡谷の名に恥じない迫力がある。

深夜に自宅を発って関越道を飛ばし、夜明け前に越後湯沢八木沢集落に到着。まだ暗い中をさっそく出発した。なにしろ長い一日になることが予想されるので、時間はあまり無駄には出来ない。ザックの中身はカメラ二台と三脚一式、昼食とガソリンコンロ、レインジャケットなどでかなりの重さであるが、水が補給可能な沢沿いのコースなので、水筒は1リットルの小さいものにした。出だしは五ヶ月前に歩いたばかりの整備されたハイキングコースで何の不安もなく、ヘッドランプの光を頼りに暗い森の中をがんがん飛ばしていった。ザックには熊除けのベルを取り付け、加えて数分毎にホイッスルを鳴らしながら歩く。熊は冬篭りぎりぎりの時期なので、用心に越したことはない。30分ほど歩いて大峰の原水と名付けられた水場に着き、美味しい水で喉を潤し休憩した。少しずつ空は明るくなり、雲が赤みを帯びてきた。

八木沢からほぼ1時間ほど歩いた頃、熊よけのホイッスルに反応してなにやら森が騒がしい。だんだん近づいてくる鳴き声はサルのようだ。構わずそのまま進んでいくと、薄暗い森の倒木の上に、二匹のサルが背中を向けて静かに前方を見ている。そしてわたしを挟んで後方の森からは、サルの群れがけたたましく鳴き声を上げている。どうやらわたしは群れの真ん中に入り込んでしまったようだ。そしてなんと道の前方には、一匹の大きなサルが岩の上に座って、じっとこちらを見ているではないか。観光地にいるエサねだりの人馴れしたサルと違い、この連中はより野生に近いので、ひとつ対応を間違えれば襲撃されるのではという不安が頭を掠めた。岩の上のボスらしきサルの表情をチラッと窺うと、彼もかなり緊張しているように見える。ここはなによりサルを興奮させないことが肝心なので、ボスザルと目を合わせないようにして、ゆっくりゆっくりと通り過ぎて事なきを得た。

鹿飛橋付近の清津峡。ここまでなら誰でも簡単に訪れることが出来る。紅葉最盛期を迎えた錦繡の山々と相俟って、峡谷は美しい景観を見せていた。

しばらく行くと栄太郎峠分岐点と書かれた道標があり、ここからハイキングのメインルートとなる栄太郎峠経由越後湯沢ロープウェー駅方面への道と別れる。案内板にはここから鹿飛橋までは上級者向きコースと標されているが、途中沢が崩壊した地点の高巻きにはロープが張られているので難なく通過でき、八木沢集落から2時間で鹿飛橋に到着した。前回来たとき橋の欄干は雪の重みで破壊されないように外されたままだったが、いまは登山シーズン中なのでしっかりと取り付けてある。鹿飛橋には、この先は悪路のため一般のトレッカーはここで引き返すようにと、警告の立て札が置かれている。鹿飛橋からの眺めは上流下流ともに両側の岩壁が迫って深い谷を形成し、峡谷らしい景観を見せている。晩秋とあって、初夏に訪れた時と比べると水量は少なくやや迫力に欠けるが、周辺は紅葉最盛期で全山錦繡の彩だ。

鹿飛橋からの登山道は荒れた箇所もあって歩きにくくなるが、踏み跡ははっきりして迷うようなことはない。30分ほどで高石沢に出た。前回はここで増水した沢に阻まれて、敗退したのであった。今は静かな流れを見せる高石沢だが、どこも幅があって飛び越えることは難しく、足を濡らさなければ渡渉出来そうにない。すぐ下に大きな滝が待ち構えているので、なるべく上流地点から渡ろうと試みたが意外と水深は深く、渡り始めたとたん水中の岩に生えた苔に足を滑らせ、あっという間にひっくり返ってしまった。重いザックが水の流れに引っ張られ、なかなか起き上がれない。必死でなんとか対岸に渡ったが、全身濡れ鼠になってしまった。幸いザックの中身は濡れてなかったが、着替えもないのでそのまま歩いて乾かすことにする。今日はとても暖かいので助かった。歩くたびに靴からブシュブシュと水が出てきて気持ちが悪い。この先は未知の領域なので、より慎重に進むとしよう。

この地図による岩場の表示を見ると、やはり黒岩沢周辺が清津峡の核心部だと分かる。峡谷沿いの点線がかつての登山道である。この古い地図では満寿山が万寿山と表記されている。（昭和45年刊「日本の渓谷」より）

相変わらず道は悪く、しかも峡谷は樹林に邪魔されて木々の間からしか見えないのが残念だが、周囲の紅葉はとても素晴らしい。鼻と呼ばれる八木沢と清津峡温泉の中間6キロ地点を過ぎ、しばらく水平な道を歩いてから沢に下ると足尾沢橋だった。八木沢から7キロ、約4時間で到着した。ここからは初夏に登った満寿山が真正面に見える。コンクリートの立派な足尾沢橋を渡り、日当たりのよい場所を選んで昼食にする。マッチが濡れてしまったので、乾かしてからガソリンコンロに火をつけ、コーヒーを淹れるために湯を沸かすが、どうしたことか沸く寸前にケトルがひっくり返えり、お湯は地面に流れてしまった。沢に下りて水を汲みなおしふたたび火にかけるが、今度はコーヒーが見当たらない。どうやら車に忘れてきたようである。なんと間の悪い日だろうか。仕方なく持参のパンをお湯で食べることにする。のんびり日向ぼっこを楽しみながらパンを食べていると、ブーンという羽音がした。先ほどもスズメバチを見かけたので用心していたが、なんといま胡坐をかいた足元にいるのは、まぎれもなくスズメバチだ。まずいことに濡れた衣服を乾かすために下着以外は脱いでしまったので、肌の露出部分が多くてかなり危険な状況である。スズメバチは左腕に止まり、そしてゆっくりと歩きだした。ここは下手な動きをすると刺される恐れがあるのでじっとしていると、今度はパンの袋にたかった。菓子パンの匂いに惹かれているようだ。ゆっくりと袋の口を閉めると、やがてどこかに飛び去った。スズメバチに対処するには、静かに気配を消しているに限る。こちらは何も悪いことをしていないので刺されるいわれはない筈だが、騒いだり払ったりすれば仲間を呼んで集団で襲ってくる可能性もある。よく秋の山でスズメバチによる被害が報告されるが、そのほとんどはハチの巣の存在に気づかずに近くで人間がむやみに騒いだことにより、刺激されたハチが防御本能を発揮して襲ってくるようである。巣は至るところにあると考えて行動すべきであり、またひとりでもパニックに陥って騒いだり逃げたりすればハチの攻撃を招きやすいので、グループ登山のときはより注意する必要がある。

さて足尾沢橋から先は急登となって、初夏に清津峡温泉側から登った満寿山から延びる日向の肩に突き上げている。この足尾沢から日向の肩までの途中に、二十数年前まで清津峡温泉に続いていた道の痕跡が見つかれば、それを辿って清津峡核心部の黒岩沢へ近づくことができる筈である。あまり高度を上げすぎると沢から離れてしまうので、古い写真を参考に沢との距離をチェックしながら急斜面の藪を進むが、どこにも踏み跡らしきは見つからない。ザックを置いてザイルだけの空身で2時間近く探したが無駄骨だった。晩秋の日は正午を過ぎてだいぶ傾き始めている。そろそろ帰路につかないと途中で日が暮れてしまう。清津峡核心部の景観は、またもや幻となってしまったようだ。心残りはあるが、来年また挑戦するつもりで撤退した。

今回を含め三回の探索で、清津峡温泉と鹿飛橋の間で一度も人に出会わなかった。登山ブームといわれながら、人が集中する山が限られているのはもったいない話である。清津峡のような素晴らしい峡谷は、多くの人が見られるようにすべきだろう。現在の満寿山に登るコースでは沢から離れてすぎて、峡谷の核心部を展望することはできないので、足尾沢橋から清津峡温泉まで黒部峡谷のように岩壁に道を穿って探勝コースを作ったらどうだろうか。八木沢と小出の両方の登山口に温泉があり、この豊かな資源を生かせば多くの登山客を呼ぶことが出来るはずである。わたしは下山後、八木沢から数分の三俣温泉に立ち寄って登山の汗を流した。山から下りて温泉に浸れるのは本当にありがたい。いで湯によって疲れきった身体は癒され、今日の苦闘も楽しく思い出されるのであった。

今回の山旅のフィナーレは三俣温泉。八木沢集落から数分の距離にあり、ゆっくりと登山の疲れを癒やすことが出来た。